

届け 世界の果てまでも

令和3年5月21日

No. 11

文責 校長 飯久保一男

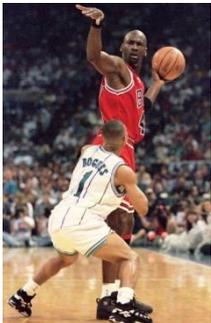
苦手なことに向き合う①

…学校に行くのがつらいとなるほど苦手なことを強制することとは違う視点で書いています。

人間誰も、苦手なことのひとつや二つはあるはずです。子どもに「〇〇が苦手なんだ」「□□は得意じゃないんだよ」と言われたらどうしますか。「苦手はなくしてあげたい」「苦手なことから逃げる子になってほしくない」など、いろいろな思いや心配が浮かんでくるのではないのでしょうか。

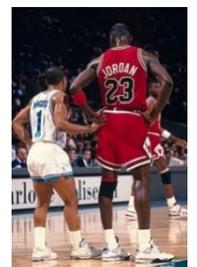
教育論がいろいろと論じられ、得意なことを伸ばす教育が推奨されています。ほめて育てることは大切です。しかし「算数が苦手ならやらなくていいよ」「漢字が苦手なら書かなくていいよ」「走ることが苦手なら体育は見学でいいよ」など、苦手なことはやらなくていいということでは済まされないことのほうが多くあります。

大人の場合、苦手の克服よりも、誰かに助けてもらうことを考えるかもしれませんが、子どもたちの場合、やってみなければわからないんじゃないのかなあ、食わず嫌いなのではないのかなあ、という面があると思っています。学習面においては、授業を魅力あるものにすることが大きく関わります。それは、研修を行いながら常に改善をしていきますので、別の機会に考えていくとして、今号では、子ども自身が苦手なことにどう向き合うか、そして親が子どもの苦手意識にどう向き合うかという面で書かせてもらいます。



左の写真の小さい選手は、すでに引退していますが、アメリカプロバスケットボールリーグ（NBA）史上最も小さい選手、マグシー・ボークスです。その身長は160cmとされています。どうやらそれもサバを読んでいたようで、156cmだったという説もあります。その小さいボークスが、2mを超える大きな選手とマッチアップするさまは、非常に面白く、小気味よかったことを覚えています。写真はバスケの神様といわれたマイケル・ジョーダンとのマッチアップの場面です。ボークスは、身長198cmのジョーダンのシュートをブロックしたこともあるのです。そのボークスの言葉です。

みんなも、自分の強さと弱さについてしっかり考えてほしい。
弱さを乗り越え、自分の可能性を磨いていこう。



ボークスはNBAでプレーできた理由を、「基礎をしっかり身につけていたこと」「自分を理解していたこと」といいます。自分の強さと弱さの両方を理解することが大切だということです。強いところだけを知るのではなく、弱いところだけを知るのでもない、両方を知ってこそ、自分の可能性を引き出せるのです。

努力できるという力は、ある意味、最高の力だと考えます。絶対にへこたれないという力が加わればもっと強力です。可能性がない子どもなどいません。160cmそこそこののにNBAで戦ったボークスがそれを証明してくれていると思います。小さかったら大きい選手にない武器をもてばいい、とボークスが教えてくれています。ただし、ボークスが言うように、基礎が身につけていることが前提です。

子どもたちを見ていて、また、担任と話をしている、本校の子どもたちには、苦手なものを避けようとする傾向があると感じています。「食べ物の好き嫌い」に始まり、「苦手な教科や学習内容」「ねばりや積み重ねが必要なこと」などを避けようとする子がいます。「だって、嫌なんだもん」「めんどくさいから…」「疲れるから…」と、先に言い訳が出てくるようにも感じます。



子どもが苦手意識をもってしまう理由の一つに、親など周囲の言葉や態度で子どもの苦手意識を増幅させてしまうことがあるようです。次のような例が挙げられます。

■ 「もっと速く、正確に」などとプレッシャーをかける

…計算問題などを「もっと速く、正確に」解きなさいなどの言葉がけは、アドバイスのようで、実は非常に漠然としている言葉だそうです。こういう言葉は子どもに焦りや不安を抱かせ、ミスを生み、苦手意識を強める原因になります。

■ 他人と比較する

…もともと苦手意識はなかったのに、「〇〇ちゃんは宿題を5分で終わらせるんだって」などと、ほかの子のほうができると言われたら、「自分はできない」と認識してしまいがちです。

■ 強制的にやらせる

…水泳が苦手な子を無理やりプールに入れることなどのことです。水が鼻や耳に入っただけで痛かった、怖かったなど、マイナスな感情と合わさってしまうと苦手意識が増幅してしまいます。強制的に大人のペースでやらせることは危険なことです。



では、親の対応としてどうしたらいいのか、残りの紙面の関係で3つだけ紹介します。

☆ 「できる」という自己イメージをもたせる

苦手意識を払拭する前提として、「自分是可以する」という自己イメージをもたせることが大切です。脳科学者の苦地英人さんは、「人間は自己イメージ以上の存在にはなれない」と断言しています。その子どもの自己イメージは親によってつくられるそうです。だからこそ、お父さん・お母さんからの日常的な声かけが重要なのです。…本校ホームページより、R2年度校長通信 No.53「脳が力をセーブしてしまう」No.64「何をほめたらいいのか」No.65「やればできる子って？」を参照ください。

☆ 少しがんばれば達成できそうな目標を立て、成功経験を積む

漢字が苦手な子（苦手だと思いつ込んでいる子）が、漢字の10問テストを一度に全部できるようにすることは難しいかもしれません。「5問できるようにしよう」「3問はがんばろう」と、少しがんばれば達成できる目標を立てることで「がんばったじゃん」と成功経験を与えることができます。そこから、少しずつ目標を上げていくようにします。明治大学教授の齋藤孝さんは、苦手の中に得意領域をつくることも有効であるといっています。例えば理科は苦手な子でも、動物好きで、名前を覚えるのは得意ということがあります。こういう得意領域を大人も一緒に探ってみることで、自信をもてる場所を見つけます。それをきっかけにして、あとは他のことも同じようにやればいいんだなということになっていきます。

☆ 生活習慣の苦手は周囲が手本になる

野菜が嫌い、お風呂や歯磨きを嫌がるなど、苦手なことは、学習や運動に限ったことではありません。これは、まず親が実践して見せることです。それを見て「自分にもできそうだ」と思わせることです。理想は、性別や年齢、生活状況や健康状態が近い人がいいとされています。その人が苦手を克服するメリットやコツを示すことが大切です。例えば、野菜の苦手な弟に対して兄が「ぼくは毎日野菜を残さず食べているから、背が大きくなったんだよ」と話すのは大きな効果があります。親には積極的に子どもの見本になってほしいと思います。